もう一つの「小民史」
——国木田独歩と日清戦争（上）

丁　貴　連

一、日清戦争とジャーナリズム、そして従軍文士

一八九四年、朝鮮の支配権をめぐって日本と清国が戦った。いわゆる日清戦争である。近代国家に生まれ変わって間もない日本は、初めての対外戦争に挙国一致で臨み、大勝利を収めたが、その挙国一致の雰囲気を作っていく上で福沢諭吉や徳富蘇峰といった、当時メディアをリードしていたジャーナリストが果たした影響は計り知れない。彼らは、戦争直前から自らが主宰する新聞や雑誌を通じて政府の政策を支持・弁護する記事を次々と掲載して開戦を促したばかりでなく、[1]戦争が始まると、総力を挙げて戦況を報じた。

当時はまだラジオ放送がなく、戦況を伝える情報は戦地から送り届けられる記事がすべてだった。それゆえに新聞各社はたくさんの特派員を派遣し、速報を競い合ったのである。その数は全国六十六の新聞、雑誌社から記者一一四名と画工十一名、写真師四名の計一二九名とされる。[2]

『時事新報』も『国民新聞』もたくさんの従軍記者を派遣したが、とりわけ『国民新聞』は主筆の徳富蘇峰自ら広島大本営に赴いたのをはじめとして、第一軍には松原岩五郎、第二軍には古谷久綱及び久保田米僊・米斎・金僊親子、国木田独歩、その他十名余りの特派員を含めて計三十名が派遣された。[3]これは『朝日新聞』に次いで多いが、その中に国木田独歩や松原岩五郎のような文学者や、久保田米僊のような画家など、いわゆる文化人が多数参加していた。[4]『国民新聞』だけではない。『時事新報』や『報知新聞』『日本』なども正岡子規や三宅雪嶺、遅塚麗水、山本芳翠、黒田清輝、浅井忠、中村不折など著名な文学者や画家を派遣している。文筆で身を立てている小説家はともかく、著名な画家がこぞって従軍

したのは、まだ写真が一般化されていなっかった当時、絵は記事だけでは伝わらない遠い戦場の様子を視覚的かつリアルに伝える手段として重宝されていたからである。

図１. 平壌攻防戦に従軍した記者たち（5）

（右端が遅塚麗水。その隣の座っているのが坂崎紫瀾、後列中央の白いナポレオン帽が三宅雪嶺）

注目すべきは、従軍記者のほとんどが新聞社より請われて戦地に赴いた中で、異国の風土に魅かれて自ら志願した者も少なくなかったことだ。正岡子規は、結核を患いながらも従軍を熱望して周囲を驚かせた。彼が命の危険を冒してまで従軍を決意したのは、自分にとって未知の戦争というものを直接自分の目で見、耳で聞き、手で触れたいという熱い思いからなのであった。(6) 同様の思いは『報知新聞』から戦地に派遣された遅塚麗水にも窺える。彼は従軍記者として戦地に行くように社より推薦されると、

> 余はこれを聴きて、初は大に喜び、而して終に憂へり、喜ぶものは未見の山河を踏みて、異殊の風俗を観、而して日朝両国干戈相見ゆるの日に当たりては、観光の客、復た筆を載せて軍旅の間に従ひ、豊公征韓後、五百年の壮観を覩ることを得るに在り、憂ふるものは垂白の老母、堂に在り、誰に頼りて廿脆の養を尽さん。(7)

と、豊臣秀吉の朝鮮征伐以来の「壮観」となる戦闘とまだ見ぬ異国の風俗を見る機会に恵まれたことを何よりも喜んだ。

小説家にとって、戦争や外国をじかに見る「従軍」の機会は、文学的センスを深めるだけでなく、自分を売り込むチャンスでもある。[8] だから多くの文学者が従軍を希望したわけであるが、希望したからといって皆が行けるというわけではなかった。従軍できなかった田山花袋が、青山の練兵場から戦地へ向かう軍隊を見送りながら、

私は遠い戦場を思つた。故郷にわかれ、親にわかれ、妻子にわかれて、海を越えて、遠く外国に赴く人達のことを思はずには居られなかつた。また、さびしいひろい野に死屍になつて横たわつてゐる同胞を思はずには居られなかつた。私は戦争を思ひ、平和を思ひ、砲煙の白く炸裂する野山を思つた。自分も行つて見たいと思つた。牙山の戦、京城仁川の占領、つゞいて平壌のあの大きな戦争が戦はれた。月の明るい夜に、十五夜の美しい夜に……。[9]

と、遠い戦場に思いをはせたことはあまりにも有名な話である。

従軍できた遅塚麗水も、従軍できなかった田山花袋も、彼らを戦場へと駆り立てたのは、人間が人間を殺し、あるいは傷つけ、多くの兵隊たちが憎悪に燃えて戦う、つまり血腥い戦争を体験したいという文学者ゆえの好奇心にほかならないが、問題は彼らの書いた従軍記の中身である。あれほどまでに戦場における戦いというものを体験したい、そしてその光景を描きたいと言いながら、結局のところ、彼らは戦争がもたらす悲惨な現実を見据えることも、戦争の本質を暴くこともなく、[10]「隣国侮蔑の排外的な忠君愛国主義」[11]に走ってしまったのである。「勉メテ忠勇義烈ノ事実ヲ録シテ敵愾ノ気ヲ奨励スベシ」[12]という「従軍心得」に基づいた報道合戦を展開せねばならなかった当時の状況からすると、仕方がなかったと言えるのかもしれないが、中には軍に言われたわけでもないのに「忠勇義烈ノ事実」を探すのに躍起になっていた従軍記者も少なくなかったと、佐谷眞木人氏は指摘している。[13] その一端を見てみると、

嗚呼、朔寧、元山の両支隊は平壌を占領せるなり、（中略）是に於て参謀は喇叭を喚て丘端に進め、『進め』の

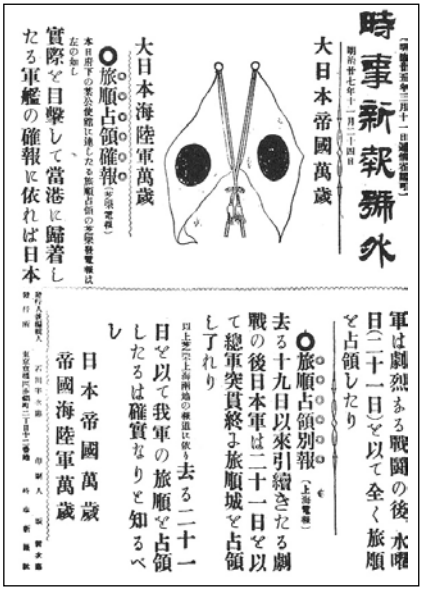
譜を吹奏せしむ、喇叭手面を仰ぎ、満腔の精気を尽くして高く吹くこと一回す、吹き終わる、参謀曰く、更に一回、喇叭手更に吹く、丘の隅、圃の陰、草の中、樹の辺、天皇陛下万歳の声ならざるはなし（『報知新聞』一八九四年九月十六日、後『陣中日記』（一八九五）として刊行）[14]

これは、『報知新聞』から陸軍に派遣された遅塚麗水が平壌陥落の瞬間の光景を伝えた文章の一部である。

われ、諸君と叫びぬ。ストップく静かにくの声左右より起り、今まで怒鳴りたる周囲、水を打ちたるが如く静まる。頭髪の頂より、足の爪先迄、吾れ感激を以て充たされぬ。

我が大日本帝国の国民は、諸君の如き忠勇なる軍人を有するを誇る！諸君亦常に記憶せよ。諸君の頭上、英聖文武なる皇帝陛下あり。諸君の後、情熱燃ゆる如き四千万の同胞あり。諸君は幸福なり。此の皇帝を戴き、此の国民を控ゆる諸君の幸福に比すべき軍人、全世界何処にかある。諸君は幸福なり。（『国民新聞』一八九四年十一月三日、後『愛弟通信』（一九〇八）として出版）[15]

これは、『国民新聞』から海軍に派遣された国木田独歩が千代田軍艦の上で開かれた天長節の祝賀会の席上で軍人たちを励ますために行ったスピーチである。


時事新報號外

大日本帝國萬歳

○旅順占領別報（上海電報）

去る十九日以來引續きたる劇戰の後日本軍は二十一日を以て總軍突貫終る旅順城を占領し了れり

以上電信は上海南端の傳説に依り去る二十一日を以て我軍の旅順を占領したるは確實なりと知るべし

日本帝國萬歳
帝國海陸軍萬歳

軍は劇烈なる戰鬪の後、水曜日（二十一日）を以て全く旅順を占領したり

大日本帝國萬歳

○旅順占領確報（本社電報）

本日皇下の某公使館に達したる旅順占領の至榮報電報は左の如し

實際を目擊して當港に歸着したる軍艦の確報に依れば日本

図 2. 旅順占領を報じた『時事新報』の号外[16]

これは、日清戦争の中で最も華々しい勝利として知られる旅順占領を報じた『時事新報』（一八九四年十一月二十四日）の号外である。

新聞に掲載されたすべての記事が忠君愛国思想に毒されていたわけではないが、当時の新聞が如何に読者のナショナリズムを湧き立たせていたかということを、これらの記事は雄弁に訴えているのである。

二、「旅順虐殺事件」と国木田独歩

ところが、こうした挙国一致の戦勝ムードの中でも戦争の悲惨な現実を直視し、戦争の本質を伝えようとした者がいた。徳富蘇峰に請われて海軍に従軍した独歩である。無論、独歩も前述の記事も含めて他の従軍記者同様、清国兵を「チャン」と卑下し、旅順陥落の際には「万歳！」と叫び、日本軍の勇敢さを称える記事を盛んに書くなど、決して挙国一致の戦勝ムードから自由ではなかった。にもかかわらず、独歩の従軍記は竹内好をはじめとする諸研究者に高く評価されている。[17] いったいなぜ独歩の従軍記は評価されるのであろうか。次の文はその疑問に答えてくれる。

愛弟、吾れ始めて『戦ひに死したる人』を見たり。剣に仆れ、銃に死したる人を見たり。

無論そは清兵なりき。見たるうち一人は海岸近き荒野に倒れ居たり。鼻下に恰好なる髭を蓄へ、年齢三十四五、鼻高く眉濃く、体躯長大、一見人をして偉丈なる哉と言はしむ。天を仰ひで仆る、両足を突き伸ばし、一手を直角に曲げ一手を体側に置き、腹部を露はし、眼半ばに開く。吾れ之れを正視し、熟視し、而して憐然として四顧したり。凍雲漠々、荒野茫々、天も地も陸も海も、附仰顧望する処として惨憺の色ならざるなし。

『戦』といふ文字、此の怪しげなる、恐ろしげなる、生臭き文字、人間を詛う魔物の如き文字、千歳万国の歴史を蛇のごとく横断し、蛇のごとく動く文字、此の不可思議なる文字は、今の今まで吾に在りて只だ一個聞きなれ、言ひ慣れ、読み慣れたる死文字に過ぎざりしが、此の死体を見るに及びて、忽然として生ける、意味ある文字となり、一種口にも言ひ難き秘密を吾に私語きはじめぬ。然り、吾れ実に此の如く感じたり。

従来素読したる軍記、歴史、小説、詩歌さへも、此の惨たる荒野に仆るゝ戦死者を見るに及びて、始めて更ら

に活ける想像を吾に与へ、更らに真実なる消息を吾に伝へ、更らに真面目なる謎を吾に解きたるやの感あり。詩の如く読み、絵の如く想ひたる源氏平氏の戦も、人間の真面目なる事実なりしを感じぬ、斯くの如く申せば、余りに仰山の様なれども、吾れ実にしか感じたり。[18]（『愛弟通信』「旅順陥落後の我艦隊」）

これは、独歩が旅順陥落四日後の一八九四年十一月二十五日に旅順港外の饅頭山砲台下の海岸に上陸し、はじめて戦死者を見た時の感想を述べたものである。独歩の上陸は、いわゆる「旅順虐殺事件[19]」が発生した直後のことだが、そのことについて独歩がどれほど知っていたかどうか、この文章からは分からない。確かなのは日本中が戦勝ムード一色に染まっていたまさにその時、独歩は戦死者、しかも敵兵の死体を見つめていたことである。そのまなざしが描き出したものは、戦争とは詩や小説、絵に描かれるような美しいものではなく、人間を破壊し尽くす「魔物」だという事実である。実のところ、この当たり前の視座を獲得した従軍記者は日清戦争を通じて独歩くらいのものである。

図3. 旅順虐殺事件を物語る死体埋葬の写真[20]

末延芳晴氏によれば、日清戦争当時軍医として第二軍に従軍した森鴎外は旅順で虐殺が行われた事実を知っていた可能性が非常に高いという。[21] その根拠として、死体の焼却や埋葬が鴎外の管轄であること、虐殺の現場を撮影した亀井茲明[22]と事件の一週間後に会っていること、そして旅順に入り、累々と横たわる死体を目にしたことを、日記に「岸辺屍首累々たり」と書きとめていることなどが挙げられている。[23] しかし、これだけのことを知っていながら、鴎外はたとえ私的な日記でさえも虐殺の事実については全く触れていない。その理由について、末延芳晴氏は次のように述べている。

独歩より二十日余り遅れて旅順に上陸したせいで、死体の焼却・埋葬が進んでいたとはいえ、それでも累々と横たわる「屍首」を目撃し、日記に「屍首累々たり」と書きつけた時、鴎外もまた、独歩と同じように、戦争の冷酷な現実と戦争そのものがはらむ「悪」の本質に直面していたはずである。しかも、この時鴎外は、独歩と違って、『舞姫』や『うたかたの記』などの作者として、あるいは坪内逍遥と「没理想論争」を交わした批評家として名の知られた文学者でもあった。にもかかわらず、このとき、軍医部長森林太郎のなかに文学者森鴎外が召喚されることはなく、それゆえに戦争の現実を直視し、その目が見たもの、心が感じたものを正確に日記に記すことをしなかった。いや、できなかったと言った方が正確かもしれない。鴎外の意識の内部にあって、国家が個人に優越する不等式が揺るぎないものとして定立し、明治国家のため、天皇のため軍医部長の職責を全うすることが最優先されていたからである。[24]

つまり、鴎外が旅順虐殺事件を知っていながらも、そのことから目をそらしたのは、国家が個人に優越するという明治の国家原理を、自明のこととして受け入れてしまったがためである。[25]

それに対して、同じく旅順虐殺の現場を目撃した独歩は、鴎外同様、いやそれ以上に忠君愛国思想に染まっていたにもかかわらず、虐殺の事実から目をそむけず、その事実を正確に書き残している。この違いはいったい何によってもたらされたのであろうか。

二十四日には陸軍上陸に艦長と共に上陸したり。

（中略）

上陸して民家に至りぬ。土民悉く逃亡して有らず。戯れに豚一頭、家鴨二羽及び婦人用のくつ二足を掠めて帰艦す。（中略）

吾今にして婦人用のくつ一個を特に吾が手もて携へ帰りたるを悔やんで止まず。吾何の権ありて此の民の家庭悦楽の一品を掠めたるか。

余人は兎も角、吾の如き天の民を一視同愛すべき信仰を懐き乍ら出来心のたはむれとは言へ、反省もせずして此の害悪を行ふ。吾実に後悔して止む能はざる也。

丘陵起伏、耕野茫々、所々に高樹あり、高樹の小蔭に民家四五の簇をなす、牛、豚、鶏、家鴨、驢馬等、自在に逍遥す。

嗚呼皇天の自由の民！　吾これに一害を加ふ。

後悔の一詩を作らんと欲して詩想成り、文字ならず

（『欺かざるの記』一八九四年十月二十九日[26]）

これは、従軍して間もない頃の独歩が艦長に従って遼東半島の花園口に上陸した際の様子を、従軍記と並行して書いていた日記『欺かざるの記』に綴ったものである。つまり、独歩は鴎外と同じく従軍記を書きながら私的な日記も付けていたのだが、その日記にひそかに日本軍が清国人の民家から食糧や生活用品などを略奪し、自身もそれに加担していたことを暴露していたのである。

日清戦争がはじまると、軍部は「内国新聞記者従軍心得[27]」を制定し、軍に不都合な記事を書いた記者は帰国させるなど、いわゆる挙国一致の報道体制を執っていた[28]。そうした時期に独歩があえて日本軍の野蛮な犯罪行為を告白したのはほかでもない、その犯行に手を染めた自身への痛切なる反省があったからである。この反省の弁に対して西田勝氏は、「日本における戦争犯罪の最初の自覚」と評価し、もし戦争犯罪を歌った独歩の詩が完成していたら、「それは日本における戦争犯罪の最初の自覚を歌い上げた、画期的な詩となっていたに間違いない[29]」と残念がっている。

指摘の通り、独歩は戦争犯罪の詩は歌わなかった。だけれども、日本近代文学史上はじめての戦争文学と目される旅順

虐殺の現場を書き残している。[30] この事実はいくら強調しても過ぎることはないと思われるが、鴎外をはじめ他の従軍記し過ぎることはないと思われるが、鴎外をはじめ他の従軍記者が見逃した虐殺の現場を独歩が直視できたのは、「文野の戦争[31]」という名の下で行われた「義戦[32]」への疑問に他ならない。

日清戦争当時、日本が国を挙げて戦争をしていたことは前述したとおりであるが、そのような挙国一致の雰囲気を作っていく上で福沢諭吉や徳富蘇峰、内村鑑三といったジャーナリストたちが重要な役割を果たしていたことはよく知られた事実である。しかも、彼らはただ単に戦争を促しただけではなく、日清戦争を「文野」、すなわち「文明開化の進歩をはかる」「文明国」の日本とその文明開化の「進歩を妨げんとする」「野蛮国」の清国との戦いと位置付け、「幾千の清兵は何れも無辜の人民にしてこれを鏖にするは憐むべきが如くなれども、世界の文明開化のためにその妨害物を排除せんとするに多少の殺風景を演ずるは到底免れざるの数なれば、彼等も不幸にして清国の如き腐敗政府の下に生れたるその運命の拙きを自ら諦む外なかるべし[33]」と、その正当性を強く主張していた。徳富蘇峰に命じられて海軍の従軍記者になるなど、メディアと深くかかわっていた独歩は、当然ながら日清戦争が単なる戦いではなく、「文明」と「野蛮」の戦いであるという事実については認識していたはずである。だが、「文明の軍隊[34]」であるはずのその日本軍が略奪に走ったのである。

三、日清戦争の事実を知らされていない人たち

その一、「文明の義戦[35]」と日本軍

独歩はこの事件が非常に気になったらしく、最初の暴露から一週間後の十一月一日と二日の両日、三週間後の十九日、そして約一カ月後の十二月二十一日の日記にも日本軍による略奪を問題にしている。日記だけではない。公の従軍記にも食糧調達をめぐる日本軍と清国の民間人とのやりとりを何度も取り上げている。

『何国の人なるや』

少尉反問して曰く

『爾、之れを知らざるか』

『知らず』(見よ、彼れ日清戦争を知らざるに似たり)

少尉乃ち答へて曰く

『吾はこれ大日本帝国の人なり』（意気堂々！）
彼問ふて曰く
『此地に来る、何事を為すぞ』
是に於てか、少尉筆を執て、大に気炎を吐く、曰く
『清国われと兵端を開らく、吾れ今来りて之れを討たんとす。然れども安ぜよ。吾れ妄りに無辜の民を害するものに非ず』（中略）
『然らば此に至る何事をかなす』
少尉少しく窮す、誤魔化して曰く
『吾兵を休養せんが為めなり』
『兵船糧米なきか』
此の問大に意味あり。彼れ兵を休養すると聞ひて、自国の存亡より、寧ろいち早く自己の米櫃を懸念したる也。
『六ヶ月の糧を蓄ふ』と答へぬ。勿論出任せなり。然れど更らに彼等を安んせんと欲し
『汝等の財産を害せざる可し、安じて可なり』（『愛弟通信』「波濤―五十余の勇士金州半島に現はる」、傍線は筆者）[36]

長い引用をしたのは、独歩が日本軍の食糧調達問題にこだわった理由を示したかったからである。

独歩は、従軍早々艦長に従って清国の花園口に上陸し、生まれて初めて見る清国の風景や家屋、人々の暮らしなどに胸をときめかせた。そして、戦場にいるのも忘れて「愛弟愛弟！意気昂然とは実に吾等此時の心持をや云ふらん。見よ見よ断崖の断処、路の丘上に赴く処、続々蟻の如く上りゆく也」[37]という記事を書いていた。しかし、独歩の感傷とは裏腹に、清国の人たちは自分たちの国が日本と戦争をしていることさえ知らされていない、いわば「社会の片隅に忘れられた人」たちなのであった。国を挙げて戦争をしていた日本から取材に来ていた独歩は、戦争という国家的運命をまったく知らされてもらえない人々の存在に驚きを禁じ得なかった[38]。と同時に、彼らは世界の情勢や国家の運命よりも、むしろ明日のおコメのことを心配せねばならないほど「憐れむべき」人々であるという事実に気付くのであった。

ところが、「戦時国際法」に従って「文明戦争」をしていたはずの日本軍は、食糧調達という理由でこの憐れな民の大事な財産を奪っていた。しかも数回にわたって行っていたの

である。それに手を染めた自分に我慢ならず、独歩が激しい自己反省を行っていたことは前述のとおりである。この事件を契機に、独歩の戦争、とりわけ軍人に対する思いは変わっていった。

十一月一日は、小計主長等と共に島に上陸して、牛、豚、鶏、家鴨を求めて帰りぬ。二日は艦長大主計等と小長嶋に上陸して午前半日を暮らしぬ。此等の事は詳記せざる可し。吾が脳頭より脱出し得ざる事なれば也。（中略）戦争に従事し乍ら、吾殆んど無感覚なり

（『欺かざるの記』「十一月六日」、傍線は筆者）[39]

昨日お五に時頃より上陸して牛豚を買ふ、実は半ば奪ふなり。但し彼等土民にして吾を疑はず、吾が求めに応ぜんか彼等も亦た利する可かりし也（中略）

凡そ宇宙観と人生観を有たぬ者程其の見職の卑しきは非ずとは軍人と交はりて感ずる処なり。（『欺かざるの記』「十一月十九日」、傍線は筆者）[40]

艦内にてはストーブの前で日々夜々馬鹿話計り致し居候、某々将校達の情話も已にきあき申候。士官次室の諸君とは日々夜々ほらの吹きくらべ致し居候。但し、精神上の事を語りてもわかる御方更らになし。宗教は愚民の道具だ位が関の山に御座候。故にストーブの前、幽懐を談ずなどの風流事は夢にも出来難く候。『軍人とは一種の愚人なり』とは小生発明の秘密名言に御座候。

（一八九四年十二月九日付け田村三治宛手紙）[41]

このように、独歩は軍人ほど卑しい連中はいないと不信感を露わにし、愚かな彼らと一緒に過ごすことによって感覚が麻痺してしまったと、軍人批判を展開するのであった。ただし公的な従軍記ではなく、読者の目に触れることのない私的な日記と手紙の中でである。

その二、戦争被害者へのまなざし

注目すべきは、こうした軍人批判ができた従軍記者は日清戦争を通じて独歩ぐらいだったことである。なぜなら、日清、日露両戦争に従軍していた森鴎外は従軍記と並行して私的な

日記をも付けていたが、彼でさえも慣行に従って日本軍の勝利や日本軍兵士の勇気をたたえ、天皇の威光を称揚するなど、いわゆる「忠君愛国主義」から自由ではなかったからである。しかし独歩は、たとえ私的な日記や手紙の中とはいえ、そのタブーを犯していた。何よりも注目すべきは、軍人への不信感が強くなっていくにつれて略奪された側の人たちへの関心も高まっていったことだ。

次の文は、十一月十八日に目撃した日本軍の略奪事件を従軍記に書いたものであるが、同じ事件を扱った前述の日記とは全く異なる書き方がされている。報道規制の影響もあってか、従軍記には略奪の事実そのものは認めておらず、日本軍を疑う清国農民の猜疑心や狡猾さ、卑屈さばかりが問題にされているのである。[42] その個所を見てみると、

支那人は軍人を以て、悉く奪掠する者と思ひ定め居るなり。牛も鶏も豚も悉く隠して、洒々然と吾等に対す。余独り或る農家に入りけるに、半白の老人吾を迎へてお世辞笑ひす。試みに筆談せんと欲すれば、彼れ先づ地に書して曰く『貧窮』と。殆んど吾を盗賊視する也。余乃はち指先にて地に書して曰く、吾等は奪う者に非ず、買はんと欲する也。家豚を売らずや。と彼只だエヘラヘと笑ふのみ、尚ほ深く吾等を疑ふもの丶如し。

主計長筆談して、僅かに牛一頭を買ふことを約す。牛は山上に在り、連れ来るべしとて、人をして遠く山上より牽き来らしむ。山上は牧場なり。

彼方に一群、此方に一群土民集り来たりて吾等を圜視す。老ひたるもあり、小児もあり、笑ふもあり、泣き出しそふなるもあり。小児等にビスケットを与ふれば、喜びて食す。老人に煙草を与ふれば、直ちに口にクワへ、火を借せと云ふ。彼等に底深き猜疑の念だになくは（ママ）、実に可憐の民と云はざる可らず。（『愛弟通信』「大連湾占領後の海事通信」のうち「ヴィクトリア湾に牛を買ふ」一八九四年十一月二十九日）[43]

確かに、独歩は略奪の原因を農民側にあるという書き方をしている。しかしだからと言って、独歩は日本軍による略奪の事実を否定しているわけではない。むしろ、日本軍を疑う清国農民の用心深さを描くことによって、生き延びるために

必死な底辺の人たちのたくましい姿を浮き彫りにしていることが、この文章から感じとることができるのである。

この記事に注目した芦谷信和氏は、日本軍を疑う清国の農民の用心深さは、清国の農民の場合に限らず、虐げられてきた封建時代の日本の農民などにも共通して見られる態度であると指摘し、清国の農民たちを見つめる独歩のまなざしにヒューマニズムを読みとっている。[44]

一方、同じくこの記事に注目した佐谷眞木人氏は、日本軍を疑う清国人の用心深さを問題にしたこのような書きぶりは、独歩の善意とは裏腹に清国人に対する差別感情がはらんでいると指摘し、独歩が事実を詳しく書けば書くほど「野蛮国」なる清国と「文明国」なる日本の違いが明らかになり、清国への差別につながると述べている。[45] 指摘の通り、独歩の描いた清国人の中には自分の国が戦争をしていることさえも知らない「憐れむべき愚かな」人や、臆病で怯懦な兵士たちが少なからず存在する。

しかし、独歩の従軍記を一読して感じられるのは、従軍中に出会った清国や朝鮮の民間人を描く際の独歩のまなざしには敵・味方の区別もなければ、文明・非文明の比較もない。戦争がもたらす悲惨な現実と、その巻き添えになった底辺の人たちへの暖かい眼差しがあるばかりである。次の文はその端的な証拠である。

吾れ独り此時又た砲台の頂に上ぼり、大連湾を見下しぬ。

幾多の運送船、幾十の堅艦、湾内の各所にかゝり、一見開港場の如し。これが敵の軍港かと思へば、何となく有り難過ぐる心地せり。かゝる要港を吾愛弟、物顔に占領する程愉快なるはなし、これを勝者の味と申す可き。

（中略）

吾等が行く路傍に、一個中年の婦人を見たり、其の色青ざめて、寒むそふに見へぬ。壁に倚りて立ち、悲しげに吾等を見やれども、誰れとて顧みるものなかりき。

（『愛弟通信』「大連湾占領後の海事通信―和尚島の砲台」一八九四年十一月十二日、傍線は筆者）[46]

これは、大連湾が日本軍の手中に落ちた直後、和尚島に上陸した時の様子を描いたものである。独歩は立派な砲台を

持っていながら一回も使うことなく逃げ出した清国兵の脆さに呆れつつ、皆と一緒に逃げ切れず島に取り残されてしまった一人の中年女性の様子を描くのを忘れていない。この女性を見つめる独歩には勝者であるがゆえの驕りや傲慢さはない。むしろ、不安げに立っている憐れな清国婦人を誰一人して顧みない日本兵の無関心を皮肉っているのである。

この文章に注目した平岡敏夫氏は、独歩の「少民へ寄せる感性は曇っていない」と評価しつつも、「ただ何故に、その婦人がそのように立っているのか、立たざるを得ないのか、という問いはない」のを問題にし、「これはたんに独歩個人にとどまらぬ、日清戦争における国民意識の問題であろう」と指摘している。[47] つまり、独歩も他の日本人同様「隣国侮蔑の忠君愛国主義」から逃れることはできていなかったのを問題にしているのである。

確かに独歩の従軍記には「大日本帝国万歳！」「天皇陛下万歳」という表現がよく出てくる。また、「見よ、支那兵は半日を出でずして、其の軍港を吾に投げつけたり。吾、有難しと小指の爪の先にて之れを受け取りぬ／愛弟！見給へ、余りの脆さに、記すべき事殆んどなきに非ずや。万歳。風を望んで潰ゆとは此事なり、話にならずとは此事なり」（「大連湾進撃」一八九四年十一月十日）のような清国兵や清国人への蔑視や侮蔑を表わす言葉が散見されているのも事実である。

しかし、これまで見てきたように、独歩は「隣国蔑視の忠君愛国主義」にとらわれながら、自分の国で戦争が起きていることさえ知らない人たちを深い憐れみの情を持って描き出している。そのまなざしが捉えた隣国の姿は日清戦争に従軍した他の日本人とは明らかに異なっている。

注

（1）例えば福沢諭吉は、戦争直前に「支那朝鮮両国に向かつて直に戦を開くべし」といった内容の社説を『時事新報』に掲載し、徳富蘇峰も同じく開戦直前の『国民之友』に「膨張ありて、征清あり」「今や好機は我に接吻せんとす」「好機とは何ぞや、言ふ迄もなし、清国と開戦の好機也」という〈大日本膨張論〉を展開した。また内村鑑三は戦中の『国民之友』（一八九四年九月）に〝Justification of Corean War〟を英文（但しこの論文は「日清戦争の義」という題で邦訳され同誌に掲載された）で発表し、日清戦争における日

本の正当性を海外に向けて訴えた。

（2）全日本新聞連盟編纂『日本新聞大観』第三集、三七〇頁の記述による。

（3）塩田良平「解説」（『国木田独歩著　愛弟通信』岩波文庫、一九四〇）一八七頁。

（4）佐谷眞木人『日清戦争「国民」の誕生』（講談社現代新書、二〇〇九）五二～五三頁。

（5）遅塚麗水編『激戦中の平壌』（春陽堂、一八九五）。ただし西田勝『近代日本の戦争と文学』（法政大学出版局、二〇〇七、七五頁）による。

（6）前田登美「正岡子規の生涯」（『福田清人編人と作品　正岡子規』清水書院、一九九一）六二～六七頁参照。

（7）遅塚麗水『陣中日記』（春陽堂、一八九四）三頁。

（8）原田敬一「民友社と平民社」（『シリーズ日本近現代史③日清・日露戦争』岩波新書、二〇〇七）一六三頁。

（9）田山花袋「東京の三十年」（『田山花袋全集第十五巻』臨川書店、一九三七）四九八頁。

（10）末延芳晴『森鴎外と日清・日露戦争』（平凡社、二〇〇八）十三～十五頁。

（11）西田勝「陣中日記」―戦争の惨たらしさと朝鮮人の不屈な抵抗」（『近代日本の戦争と文学』（法政大学出版局、二〇〇七）九八頁。

（12）佐谷眞木人、前掲書（註4）七四頁。

（13）佐谷眞木人、前掲書（註4）七四頁。

（14）遅塚麗水、前掲書（註7）一二一頁。

（15）国木田独歩「愛弟通信―「艦上の天長節」（『国木田独歩全集第五巻』学習研究社、一九九六）五一頁。

（16）佐谷眞木人、前掲書（註4）七七頁。

（17）竹内好「ナショナリズムと社会革命」（『人間』一九五一年七月号）、小田切秀雄「国木田独歩と石川啄木」（岩波講座『文学』第七巻、一九五四年五月）、福田容子「独歩における愛国心」（『日本文学』一九七〇年五月号）、山田博光「『愛弟通信』とその周辺」（『国木田独歩論考』創世記、一九七八）などがある。

（18）国木田独歩、前掲書（註15）八〇頁。

（19）「旅順虐殺事件」とは、日清戦争の旅順攻略の際、市内および近郊で日本軍が新国軍敗残兵掃討中に旅順市民も虐殺したとされる事件。井上春樹『旅順虐殺事件』（筑摩書房、

一九九五）による。

(20)『日清戦争従軍写真帖―伯爵亀井茲明の日記』（柏書房、一九九二）一九九頁。

(21) 末延芳晴、前掲書（註10）四二頁。

(22) 亀井茲明（かめいこれあき）は、一八六一年六月に公卿堤哲長の三男として生まれ、亀麿と命名される。十一歳で明治天皇の側近、ご給侍役となる。一八七六年十六歳の時、石見国（島根県）旧津和野藩主亀井茲監の養子となり、茲明と名乗る。十七歳の一八七七年、イギリスに留学してロンドン大学予科で学ぶ。三年後に帰国し、宮内省に勤務したが、一八八六年にドイツに留学する。ベルリン大学に入学し、美術や芸術に深い関心を寄せ、欧州各地で視察旅行を行い、染布や壁紙、美術品など多数を収集する。この留学中に「美術論第一、第二、第三」を執筆し、美術と国家の関係について研究を行う。一八八九年に開催されたパリ万国博覧会には連日通って見学している。一八九二年に五年間の留学を終えて帰国し、美術と国家のあり方について立案し、実施に移そうとするが、工場の災害などで失敗に終わる。三十四歳の年の一八九四年に日清戦争が始まり、自費で写真班を編成して従軍を志願し、戦闘場面、砲台、錨地など、三〇〇枚の写真を撮影する。しかし、この戦場での生活で健康を損ない、一八九六年三六歳の若さで死去する。翌一八九七年に写真集『明治二十七年戦役写真帖』と、一八九九年に戦場日記『従軍日乗』が亀井家によって出版される。『日清戦争従軍写真帖―伯爵亀井茲明の日記』（柏書房、一九九二）による。

(23) 末延芳晴、前掲書（註10）三六頁。

(24) 末延芳晴、前掲書（註10）四八頁。

(25) 末延芳晴、前掲書（註10）三五一頁。

(26) 国木田独歩「欺かざるの記」（『国木田独歩全集第七巻』学習研究社、一九九六）二四二頁。

(27) 防衛庁防衛研究所戦史部資料室所蔵、陸軍省『緊要事項集』（明治二十七年六月～）所収。ただし西田勝前述の『近代日本の戦争と文学』による。

(28) 佐谷眞木人、前掲書（註4）七八頁。

(29) 西田勝、前掲書（註11）八二頁。

(30) 末延芳晴、前掲書（註10）四七頁。

芦屋信和「国木田独歩の見た中国―「愛弟通信」」（『作

家のアジア体験―近代日本文学の陰影』世界思想社、一九九二）四〇頁。

（31）福沢諭吉が率いる『時事新報』は、開戦直後の一八九四年七月二九日に「日清の戦争は文野の戦争なり」と題する社説を掲載している。「文野」とは、「文明」と「野蛮」のことだ。つまり、戦争を「文明開化の進歩をはかる」日本と、「進歩を妨げんとする」清国との戦いと位置づけた。

（32）反戦主義者と知られる内村鑑三は、「日清戦争の義」（『国民之友』一八九四年九月三日号）で、「日本は東洋における進歩主義の戦士である。故に、進歩の大敵である支那諸国を除けば、『日本の勝利を希望しないものは世界万国にあるわけがない』、したがって日清戦争は「我々にとっては実に義戦」であり、「外科医が裁断器を以て病体治療に従事する時の念を以て清国に臨む」べきであると主張した。

（33）『時事新報』一八九四年七月二十九日付社説。

（34）大谷正『兵士と軍夫の日清戦争』（有志舎、二〇〇六）五八頁。

（35）大谷正「『文明戦争』と軍夫」（原田敬一編『日清戦争の社会史―「文明戦争」と民衆』フォーラム・A、一九九四）一九六頁。

（36）国木田独歩、前掲書（註15）三二～三三頁。

（37）国木田独歩、前掲書（註15）二七頁。

（38）佐谷眞木人、前掲書（註4）六三～六四頁。

（39）国木田独歩、前掲書（註26）二四七～二四八頁。

（40）国木田独歩、前掲書（註26）二四九～二五〇頁。

（41）国木田独歩「書簡」（『国木田独歩全集第五巻』学習研究社、一九九六）三六四頁。

（42）芦谷信和、前掲書（註30）三五頁。

（43）国木田独歩、前掲書（註15）六六頁。

（44）芦谷信和、前掲書（註30）三六頁。

（45）佐谷眞木人、前掲書（註4）六一～六五頁参照。

（46）国木田独歩、前掲書（註15）五七頁。

（47）平岡敏夫「独歩と花袋の戦争」（『国文学解釈と鑑賞特集独歩と花袋』至文堂、一九八二年七月号。